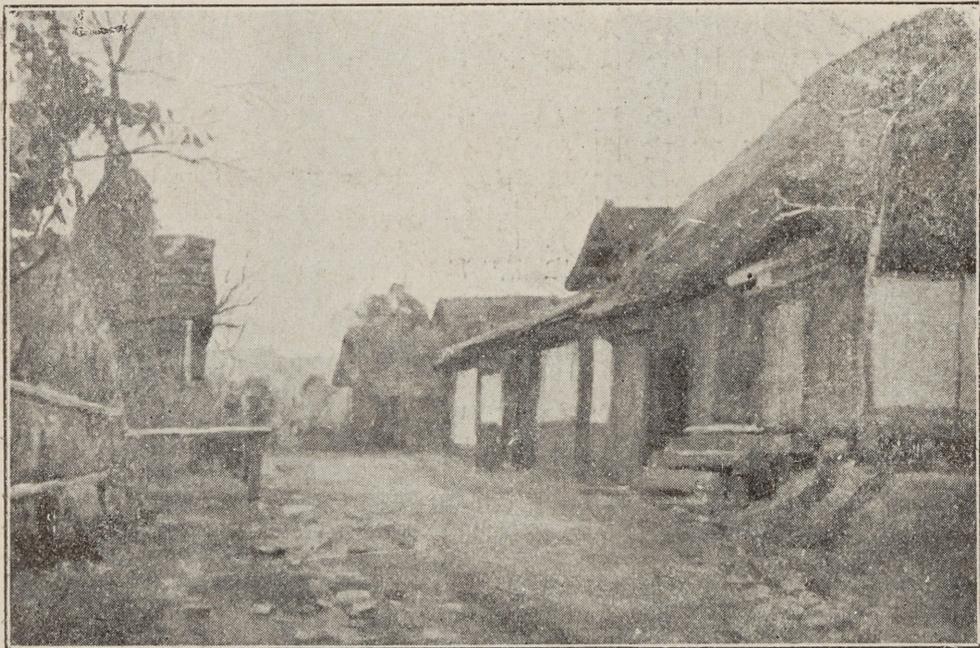


南部アメリカの秋

中川 八郎

二度目の外遊でアメリカに居た時、インデヤナポリスで T. C. Heston という風景畫家に逢つた。この人は米國中部畫家團體のプレジデントで、名望ある極めて親切な人で、インデヤナポリスから汽車で三四時間のプロクターといふ處にサンマースッヂオを持つてゐる。私は野山の美しい秋の頃、そこで數週間スチール氏と共に近處の寫生をして暮したが、此邊はアメリカでも景色の至極よい處であつたから、愉快に勉強が出来た。是迄は色紙に水彩を試みたことはなかつたが、此時水彩繪具で油繪のやうな感じを出して見やうと思つて、初めてホワイトを混ぜてグワッシン風のもの（口繪はその時の寫生）をやつて見た、純粹の水繪とは調子が變つて物によつては中々面白い結果が得られるやうに思ふ。



廢驛 (太平洋畫會出品) 望月省三筆

名家談片

○ 太平洋畫會に出たマルタンの繪を見て、印象派の末流をくむ人達は少しは考へるが、印象派とさへ云へば、赤や黄や紫の繪具をデコデコに塗つて、ドツチが上だか下だか分からぬものを畫いて、獨りて喜こんでゐるが、君達の御先祖はソんな馬鹿なことはしてゐないよ、まアあのデッサンの確かなことを見たまへ、そして、メタ、に塗りつけてあるあの繪具には、それ、に意味がある、一筆ごとに考へ々々してやつたのに違ひない、額像の隅から隅迄、何處を見つてチツとも、ゴマカシがない。

○ 古典派、傳奇派、寫實派、自然派、印象派、何でも構はぬ。よいものはいつ見てもよい。

* * *